学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　火野葦平文学研究

申 請 者 氏 名　　陳　徳超

本研究は火野葦平作品論及び作家論の系譜をたどったうえで、葦平の代表作品「糞尿譚」（『文学会議』1937年11月）、「青春の岐路」（『世界』1958年1―10月）、「魔の河」（『群像』1957年9月）、「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）、「革命前後」（中央公論社、1960年1月）、「赤い国の旅人」（朝日新聞社、1955年12月）から、作家の庶民観の行方と彼の戦争認識を明らかにしようとする試みである。

第1章は「火野葦平作品論及び作家論の系譜」である。葦平文学、その中でも取り分け日中戦争に取材したいわゆる戦争文学に対して、戦時中から現在までの間にさまざまな視点からのアプローチがなされてきた。作家への批評、或いは作品の読み方は時代と共に変わっていく。作家が創作する際に意識するか否かにかかわらずその時代の刻印を作品の中に打たないわけにはいかないのだが、それと同じように、読み手もまた己の生きている時代とその状況に立ち向かう中で作品の意味を見出そうとするからである。だとすると、研究史とは唯一の正しい作品把握に至るための過程であるのではなく、各時代の性格に基づいた固有の解釈の連続体以外にはあり得ない。本章では、このような問題意識に基づいて葦平が書いた作品、及び作家自身の論考を時系列的に考察した。本章で用いるのは、葦平文学においてもっとも代表的な作品である「糞尿譚」や「兵隊三部作」などに対する論考、及び池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第Ⅰ部』（インパクト出版会、2000年）等葦平を研究するうえで見過ごすことのできない基本的な先行研究である。これにより、時代と共に変化していく葦平作品の読まれ方の様子を素描し、あわせて近代日本の精神史の一端を読み取ることが、本章のモチーフである。

第2章では、作家以前における葦平の庶民観を研究対象とする。本章では、作家としてデビューする以前における葦平の庶民心情が、その形成過程において、中でもとりわけプロレタリア運動に専念している時期の彼の、周りの中国人、朝鮮人下層労働者に対する共感の在り様を捉えて筆者なりの考察を試みた。その際に、考察の対象となる時期を明確にすれば、早稲田大学在学中の入隊体験を終えた1928年から、検挙にあって転向を決意、ふたたび文学へ復帰する気持ちになった1932年頃までの4年間ということになる。更に、後年葦平は『火野葦平選集第一巻』（創元社、1958年5月）の自筆解説で「或る事情から、昭和七年、ふたたび、文学へ還った」（前掲書、419頁）とおのずから追憶しているが、その「或る事情」とは一体何を指しているのか。本章の最後に、葦平の転向問題をも視野に入れて

検証した。この間に葦平が遭遇したさまざまなドキュメントについては、彼の自伝的作品「青春の岐路」(『世界』1958年1—10月)「魔の河」(『群像』1957年9月)などに結実しているので、本章での叙述の展開において、それらに依拠することが多々あった。

第3章「火野葦平『糞尿譚』に見る魯迅『阿Q正伝』の影—彦太郎と阿Qの場合—」では、葦平文学における庶民観の原点を探った。1938年3月に葦平が第6回芥川賞を受賞したのは、前年11月に雑誌『文学会議』に発表した小説「糞尿譚」によったものである。主人公の彦太郎が力を尽くして取り組んだ近代的な糞尿汲取事業を主なモチーフに描いているこの作品は、魯迅「阿Q正伝」から大きな影響を受けている可能性が高いと思われる。これを論証するため、本章では、「阿Q正伝」と「糞尿譚」の同時代における位置づけや政治的な意義に共通性を見出したうえで、主に「家系に見る両主人公の類似性」、「彦太郎の『精神勝利法』」、「彦太郎の『浮気の悲劇』」、「『糞尿譚』の『大団円』」という四つの観点から、その類似性の確認作業を行った。

第4章では、葦平の「麦と兵隊」(『改造』1938年8月)を研究対象とする。従来の研究において、葦平がこの作品を通じて日中戦争に協力した戦争責任があるという論調と、彼はひたすら「民衆」を描いていることで反戦思想を告白しながら軍国主義の犠牲者になったという評価が並行しており、両者の間には乖離が見られるのだが、その乖離をどのように埋めていくかが本稿のモチーフである。そのために、本論では、まず作品に出てきた中国人像に着眼し、それらをその文脈に即しつつ綿密に分析することにより、戦場における作者の中国人観の貧弱さ、彼がそのような「異民族」表象を通じて日中戦争に加担してしまったことを検証した。しかし、だからといって、その記述が庶民的な視座を持っていることとは、決して矛盾しない。戦争に協力したとはいえども、作家の主体性が根こそぎ失われたわけではない。それを証明するために、作中に出てくるいくつかの場面に焦点をあてて論じている。最後に、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性が併存しているのだが、それを同じ創作方法、すなわち同じ「ありのまま」の表れとして統一的に把握する必要があるというのが筆者の見解である。

最後に終章では、本論で述べた内容を総まとめしたうえで、「赤い国の旅人」(朝日新聞社、1955年12月)と「革命前後」(中央公論社、1960年1月)をテーマに戦後における葦平の新中国認識や戦争認識などについても考察した。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 122 号	氏　名	陳　徳超
論文題目	火野葦平文学研究		

（論文審査概要）

論文の概要は下記のとおりである。

序章では、火野葦平をめぐっては、「庶民作家」といわれるその文学の原点を明らかにすること、および生い立ちからくる下層民への共感がその後、どのように推移するのかを明らかにすることが必要だと述べる。そのためには、作品をそのものとして分析することを通して作家の全体像に迫るという方法をとるとしている。

第１章「火野葦平作品論及び作家論の系譜」では、葦平作品がこれまでどのように読まれてきたのかを、時系列によって考察している。それは、研究史とは唯一の正しい作品把握に至るための過程であるのではなく、各時代に規定された固有の解釈の連続体以外にはありえない、という問題意識に基づくものである。そうして時代とともに変化してゆく葦平作品の読まれ方を素描している。

第２章「作家以前における火野葦平の庶民観」では、作家以前における葦平の庶民観の形成過程を論じている。とりあげるのは、入隊体験を終えたあと、検挙されて転向し文学へ復帰する気持ちになった４年間であり、プロレタリア運動に専念している時期の、中国人や朝鮮人下層労働者に対する共感のありようを観察している。

第３章「火野葦平『糞尿譚』に見る魯迅『阿Ｑ正伝』の影」では、葦平文学における庶民観の原点として「糞尿譚」をとらえ、魯迅「阿Ｑ正伝」から大きな影響を受けていることを明らかにしている。

第４章「火野葦平『麦と兵隊』論―戦争文学への一視点」では、「麦と兵隊」を取り上げる。従来、この作品を通じて葦平は日中戦争に協力したという見方と、民衆を描くことで反戦思想を告白したものだとする対立する見方が併存している。そこで作中の中国人に注目し、その描かれ方を分析することで、葦平の中国人観の貧弱さが、結果的には戦争に加担してしまっていたことを見る。しかし同時に庶民的な視座を失ってはいなかった。そうした二面性をありのままに見ておくべきだとする。

終章では、以上の内容を再度まとめたうえで、戦後の葦平の中国認識や戦争認識などについても考察している。

こうした内容に対する評価は下記のとおりである。

１．創造性

葦平文学の原点に魯迅「阿Ｑ正伝」があることを明らかにしたことは、独自な論点として評価できる。また、かたや庶民作家として、他方では戦争協力者として相対立する評価が並立していることに対して、作家以前の原点にもたちかえることで、庶民観のあり方に即して分析し、評価が併存する理由を考察していることも新しい。このような点において創造性を優れたものとして評価することができる。

２．論理性

文学作品の分析方法として、作品に作家の内在的な体験が反映されていると見るのではなく、作家といったん切り離し、作品そのものを客観的に分析することから始めるという、分析方法を明示している。また取り上げた作品は、葦平文学を考えるうえで、いずれも画期となるものである。総じて自覚的な方法によっていることは明らかであり、論理性においても優れていると評価できる。

3．厳格性

葦平文学に関する先行研究は十分に渉猟されている。厳格性においても優れていると評価できる。

4．発展性

本論文において葦平文学を分析した方法は、今後他の作家や作品を分析するうえでも有効なものだと考えられる。日本近代文学研究の発展に寄与することが期待できる。したがって発展性においても優れたものとして評価できる。

以上より、全体として学位論文の水準に達していると判断できる。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）森下 徹

（氏 名）吉村 誠

（氏 名）有元光彦

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印